

2020年度日本体育学会体育社会学専門領域研究会

1. 日 時 2020年11月29日(日)13:00～15:00
2. 開催方法 Zoomを使用したオンラインライブ
3. テーマ 制度としての「体育」の社会的変容—対象を見失う? 「体育社会学」の転機—

4. 内 容

【登壇者】

原 祐一 (岡山大学)
第四次産業革命と技術革新の中の学校体育の揺らぎ

高井昌吏 (東洋大学)
メディアから捉えた学校体育のゆらぎ

市井吉興 (立命館大学)
新たなスポーツの潮流と学校体育のゆらぎ

【司会】

高橋義雄 (筑波大学 / 研究委員会)
松田恵示 (東京学芸大学 / 研究委員会)

司会

高橋義雄（筑波大学）

高橋：1時になりましたので、早速始めたいと思います。「2020年度日本体育学会体育社会学専門領域研究会」です。「制度としての『体育』の社会的変容—対象を見失う？『体育社会学』の転機—」というタイトルで研究会を始めます。今回は、新型コロナウイルスの関係で延ばし延ばしになったプレセッションを、研究会という形で行いますが、状況が大きく変わっているので、発表者の皆さんも、昨年のもとは違うバージョンで資料を用意しています。今日はどうぞよろしくお願い致します。

初めに、領域の会長である菊（幸一）先生に話してもらいます。よろしくお願い致します。

菊：皆さん、こんにちは。日曜日のひとつき、このような形で研究会が行われることを大変ありがたく思います。先ほどご紹介があったように、今回は、前年度のプレセッションで行う予定だったこの専門領域の研究会が実現できるということで嬉しく思います。それだけに、このテーマが非常に魅力的でもあり、また登壇者の方々も、体育の領域ではないというか、少しアウトサイダー的な立場でいろいろ議論されると思いますので、大いに期待しているところです。

ところで、日本体育学会は、来年度から日本体育・スポーツ・健康学会に名称を変更することになっています。大きくは、これまで通り学理の追求という、いわゆる学会としての研究を進化させるとともに、さらには今、日本学術会議をめぐるいろいろな社会における学術の在り方が問題になっていますが、社会に対して政策的にもどのような発信をしていくかを念頭に学会として本格的に取り組んでいくということで、学会大会の在り様も随分変わることになっています。

そういう変化の中で、今後、体育社会学の専門領域が、その研究の内容をどういうふうに発信していくのかということが、非常に大きな課題として出てきます。体育社会学は政策にも関わる内容を随分持っていますので、その点についても、今日の内容は私たちにとって非常に参考になる議論になると思っています。よろしくお願い致します。

今日は、主に社会学の立場から市井（吉興）さん、高井（昌吏）さんにはいろいろと示唆をいただきたいと思いますので、よろしくお願い致します。また、原（祐一）さんには、主に体育学の立場からになると思いますが、よろしくお願いしたいと思います。それでは、司会の高橋さんにお返しします。

高橋：ありがとうございます。申し遅れましたが、今日の司会を務める筑波大学の高橋（義雄）です。今日はもう1人、コンピューター、ネットの管理をしてくれる東京学芸大学の松田（恵示）先生も司会に入ります。どうぞよろしくお願い致します。開始する前に、菊先生と重なる部分もあるかもしれませんが、今回の趣旨を大きく説明します。

それでは、「制度としての『体育』の社会的変容—対象を見失う？『体育社会学』の転機—」ということで今日のシンポジウムを行います。まず、先ほど、会長から話がありましたように、2021年4月1日から、学会の名称が変わります。これまでは日本体育学会でしたが、日本体育・スポーツ・健康学会になります。「スポーツ」と「健康」が入るということで、学会自体の捉えられ方が大きく変わると予想されます。

こうした議論は、実は、1980年代後半の本部企画でも既に採り上げられていました。学会が巨大化していったことと、学問分野が細分化して多様な研究が行われるようになったことから、1989年のシンポジウムで、学会名称問題が既に採り上げられていたことが分かっています。

また、2000年に、海外向けに立ち上げられた雑誌が、「フィジカル・エデュケーション—スポーツ・アンド・サイエンス (Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Science)」という、体育学の枠を超えたタイトルで出版されるようになりました。

こうした流れは、社会の動きとも連動しています。例えば、文部省が、省庁再編の中でできた文部科学省の体育局の名称を、スポーツ・青少年局として「体育」を外しました。また、「保体審答申」と言うように、常に「保健体育」だったものを「スポーツ振興計画」として、「スポーツ」を入れました。さらに、2011年にはスポーツ基本法ができ、民間の団体ではありますが、日本体育協会が日本スポーツ協会へと名称変更をしました。このように、社会の中でも「体育」から「スポーツ」へという流れがあったように感じます。

今回の名称変更について学会から出された趣意書にも書かれていますが、会員の中に、学会会員の研究内容が、既に「体育」ではカバーできなくなっているという認識が広がったことと、先ほどの菊会長の話にもありましたが、学術のための学術から、社会のための学術へという圧力が高まっていったことで、狭義の学校体育より、広い分野での社会への貢献が求められるようになったと考えられます。

さらに、制度としての学術体系においても、例えば、科研費の審査システムでは、「体育」という審査項目が「スポーツ科学・体育・健康科学」に変わり、「スポーツ科学」、「健康科学」が出てきています。実は、日本学術会議において体育・スポーツ系の分野は、人文社会科学系の第1部ではなくて、生命科学の分野に入っているということで、かなり自然科学的な分野で捉えられるようになっていえると言えます。

こうした変化は、マネジメントや経営学の分野ではPEST(PEST)分析があてはまります。これは政治・法律的な要因(Politics)、経済的な要因(Economy)、社会・文化・ライフスタイル的な要因(Society)、技術的な要因(Technology)の英語の頭文字を取ったものです。こうした外部環境の急激な変化への対応が、学会の名称の変更という形で現れました。

さらに、今日の焦点は学校体育なので、お三方の発表のタイトルの最後に、「学校体育の揺らぎ」という言葉が必ず付いています。学校体育も、外部環境が変われば、当然、影響が出てきていると予想されます。特に、コロナ禍の体育は、対面しない体育実技はどうするのかということが実際問題として現れたわけですから、現場の方々にはかなり揺らぎが出ていると思います。こうした背景を基に、今日は、体育社会学は誰のために、何を目的にして営まれるかということまで落とし込めれば良いと思っています。

本日の発表者は、教育の体育、学校体育の現場に近い原先生、実際の体育教師をメディアがどう見ているかということで、外部の目線を持つ高井先生、新しいスポーツの流れが学校体育にどのような影響を与えるのかということをお話す市井先生です。その後、総合討論に入ります。

早速ですが、チャットにあるとおり、原先生、高井先生、市井先生の順に進めます。ちなみに、参加の皆さんから質問を受けたいと思います。まず、チャットでいろいろなコメントを書いていただくと、私が常時チャットを見ているので、質問を振りやすいと思います。ぜひチャットを使ってコメント欄に入れてください。それでは、こちらの資料を共有しますので、原先生、発表をお願いします。

第4次産業革命と技術革新の中の学校体育の揺らぎ

原 祐一（岡山大学）

岡山大学の原です。よろしく申し上げます。昨年の学会大会は台風で流れ、そのあとは新型コロナウイルスが来ました。発表のために準備していたものを変更し、私に与えられたテーマ「第4次産業革命と技術革新による学校体育の揺らぎ」に焦点を絞るような形で報告をします。

1. 第4次産業革命とは

まず、第4次産業革命については押さえるまでもありませんが、念のために共有します。社会の科学技術は機械化、効率化、自動化、さらに最適化というふうに進歩してきました。この中で、非常に大きなうねりというか、私たちが今回考えなければいけないのは、第4次産業革命が、製造業だけでなく、非製造業にまで影響を及ぼすことだと思います。

この非製造業の中に教育サービスが位置づけられています。学校体育も、教育的な営みの中で行われる領域ですので、教育サービスとの連動の中でどのように考えるかを話題提供したいと思います。

2. はじめに

私がこのテーマをいただいて、一番初めに考えたのは、揺らぎの震源がどこにあるかです。揺らぎの震源がどこにあるのかによって、考えるストーリーも変わってきます。第4次産業革命、技術革新が、学校体育に直接揺らぎを及ぼしていることもあると思いますが、今日の報告では、学校教育システムが揺らいでいることと、スポーツ自体が揺らいでいることとの2本の柱から考えてみたいと思います。

先ほど、菊先生がされた新型コロナウイルスの話は、以前からあったこれらの揺らぎをさらに明示化したり、この揺らぎを解決していく方法を促進させたりした要因であると捉えています。

学校教育システムを考えると、内部構造にお

ける不規則と社会における不規則が常にあります。揺らぎの震源の一つとして例えば、ブラック教員という形で、教員の労働環境が非常に劣悪であるという指摘に見られるように、学校内部のさまざまな所で、システムの不規則や無理が指摘されています。一方で、校則のような学校の常識が社会の常識ではないということも指摘されています。つまり、社会の価値観と学校教育の中での価値観がずれているということが指摘されているわけです。

そういった意味では、学校教育システムをめぐって、内側と外側から、さまざまな問題や課題という形で揺らぎが指摘されているのだろーと思います。ですが、学校教育システムは非常に強固で、規則的に進んでいるところがあります。ただし、新型コロナウイルスの影響で、この規則的な部分が1回止まりました。止まったことによって、一時期、これからどういうふうに変えていかなければいけないかという議論が活発になされました。今、また感染が増えています。学校がある程度通常どおり進む形になると、元に戻すという議論や圧力がかなり強いように感じています。それは、私が学校現場に行く中で肌感覚として持っていることなので、実際はそうでない部分もあるかもしれませんが、学校の先生方と話をしていると、従来どおりに・・・という流れが非常に強いように思います。

3. これまでの学校体育の揺らぎ

体育は、このような外側からの揺らぎに対してなかなか変わらない学校教育システムの中に置かれていると思います。

ただ、この体育をめぐっては、これまで、その教育目的自体が変わってきたという指摘がずっとあります。戦前のからだの教育から、戦後の民主主義社会を実現するためのスポーツを通しての教育、1980年代からの生涯スポーツ

社会に向けた運動・スポーツの教育という形で、教育の目的は大きく変わってきたと整理されることが多いと思います。

このような状況の中から、次の体育の目的はどのようなものになるかということは、まだまだ議論の最中で、コンセンサスがなかなか得られていない状況だと思っています。あとにも話しますが、一つには、コンピテンシーを高めるためにはどう考えればいいのかということが、一つの論点として挙がってくると思います。

大きな目で見ると学校体育も揺らいできましたが、「では、本当に現場が揺らいでいるか」と言われると、いまだに規律訓練型の授業があり、あまり揺らいでいない側面もあります。それはなぜかという点、背景には、やはり、学校教育システムが工業社会のモデルで作られたことがあると思います。この価値観が、学校教育システムの中でまだまだ合理性を持っていると認識されているために、体育もなかなか変わらないのだと思います。

4. 今、教育を震源とした揺らぎが学校体育へ何をもたらそうとしているのか？

ただ、この第4次産業革命は、そういった価値観を根底から覆すような揺らぎを起こす可能性があると思います。一つは、これからは個別最適化学習が進むと言われていたからです。ビッグデータやAIなどの発達で、データを解析することによって、子どもたちそれぞれに個別最適化されたカリキュラムが提供されます。

そうすると、これまで、算数のある部分でつまづいていた子は、もっとさかのぼってここでつまづいているということを可視化するような形でデータが提供され、子どもたちはそれに対応して学習を進める形になっていくと思いますが、そうなったときに、学校体育は何を最適化して学習させるのかという議論が出てくると思います。

例えば、垂直跳びをAIに学習させ、「あなたはここをトレーニングすればうまくいくよ」ということが出てきたとして、確かに、垂直跳びをめぐってはより最適化、個別化された学習プログラムが提供されるかもしれませんが、で

は、なぜ垂直跳びを高く跳ばなければいけないのかということ、やはり出てくるでしょうし、ドリブルの仕方が個別最適化されたとしても、それがゲームの中で使える最適化学習なのかということが問われます。また、戦術を学習することを考えたときも、トップアスリートにはそれができても、子どもたちの身体ではできないというギャップも生まれると思います。

そういう意味では、他教科が個別最適化される中で、体育は何を個別最適化しなければならないのかという揺らぎが起こると思います。

次に、技術革新ということの中で、社会全体は、コンテンツからコンピテンシーベースへ能力感を高めようとしています。これは日本だけでなく、OECD全体がそういう方向に向かうことになるので、体育もこれに批准するとすれば、変わらざるを得ません。

社会学だと、ハイパーメリトクラシーと言われてきましたが、こういう能力をどのように定義するのかということが出てくる一方で、能力を高めるためにサッカーがあるわけではなく、サッカーが先にあると考えると、サッカーというコンテンツの内容を学ぶことにどのような意味があるのかとか、それはサッカーでなければいけないのかとか、そのようなカリキュラム論の中で揺らぎが出てくるのではないかと思います。

さらに、岡山大学もこの方向にかじをきっていますが、SDGsの流れが大きくあると思います。これは教育だけでなく、全ての企業も含めて、進むべき方向性を示していますが、SDGsはグローバル化を促進しますし、一つの課題が単線的に解決できるわけではないので、思考を課題システムから包括システムに展開しなければいけないとか、主権国家体系から地球社会へということを考えなければいけないとか、かなりドラスティックな考え方が出てきていると思います。

こういうSDGsの目標を個々に見ると、非常に重要な課題を示していると思われませんが、その背景にある考え方を含めて、学校教育で取り扱うとなると、例えば、地球社会ということに基づいたときに、現在の「学習指導要領」

は国民を設定しているのです。では、誰を対象に公教育や公的サービスを行うのかということがどうしても付いて回ると思います。

そういった意味では、体育は誰のためにあるのかということが、当然のことながら、ディスカッションされるべきこととして出てくると考えます。このようなスポーツ教育をめぐる、テクノロジーの進化とともに、考えなければいけないことが沢山出てきています。

5. スポーツを震源とした揺らぎが学校体育へ何をもたらそうとしているのか？

教育の次に、スポーツを震源とした揺らぎについて考えてみます。これまで、スポーツも近代化のプロセスの中で、さまざまな形で変化してきました。このあたりは、ノベルト・エリアスなどいろいろな議論があるので、ここでは深く触れませんが、スポーツ自体も揺らいできました。

近年、第4次産業革命や技術革新の中で出てきているテクノロジーに焦点を当てて考えてみると、最近ではCMなどで、AR技術を使ったようなスポーツも目にするようになりました。例えば、これは「HADO」というゲームですが、アニメーションの世界の「かめはめ波」が、AR技術を通して見えるようなゲームになります。仮想空間と現実空間を融合させたような形で展開されるゲームの登場です。

また、VRといった、バーチャル空間に入るようなテクノロジーも、今はかなりスポーツに提供されるようになっていきます。特に、見るスポーツに関しては、こういった技術がたくさん活用されているように思います。360度多視点の映像を視聴者が取れるようになったり、右側は楽音が既に使っているものですが、認知トレーニングができる状況になっていたりしています。

さらに、超人スポーツ協会が立ち上がり、人間拡張技術を使ったスポーツを展開するようになっていっています。もっと言うと、eスポーツは、最近、部活動でも出てくるようになりましたが、サイバー空間上でのスポーツも、社会の中で大きなうねりを見せています。

一方で、レクリエーション的な部分で言うと、

ゆるスポーツというものが出てきて、スポーツ観の転換とともに、さまざまなテクノロジーを使い、入力デバイスを変換しながらスポーツ参加していくような動きがあります。

図の右上にあるエクストリームスポーツは市井先生の議論に譲りたいと思いますが、スポーツは、テクノロジーによってかなり地殻変動を起こしていると思います。それを簡単にプロットしてみました。まだみられていない部分も非常にたくさんありますが、こういった新しいスポーツが、どういうふうに身体を変えるのかということ、少し考えてみました。

近代スポーツやエクストリームスポーツは、個人の能力を最大限に引き出し、機能拡張的な身体に変えるのではないかと思います。超人スポーツやARを使ったスポーツも、やはり、身体を変えています。

ある意味、テクノロジーを身にまとうことによって、付加的に拡張する身体を獲得していくようなスキームが出てきていたり、ARのような錯覚、サイバー空間とフィジカル空間を兼ね備えたようなゲームもありますし、eスポーツなどではキャラクターとどのように同期していくかという同期身体、VRのような分身する身体、さらに言うと、ゆるスポーツのように、身体能力をあまり問題視しないような、コモディティー化する身体を扱うようにスポーツが揺らいでいると思います。

6. おわりに

これまでの学校体育は、機能拡張身体のことをベースに議論してきたと思います。第4次産業革命や新型コロナウイルスによって、それ以外の身体が一気に出てきたのではないかと思います。

多様な身体が、教育の対象になるかどうかということが、揺らぎの震源になっていると考えています。教育の側で言うと、効率性や公共性を社会の側が推進し、教育全体をサービスとして推進していくときに、その種目を選ばなければいけない根拠は何かという、カリキュラム論の部分でさまざまな揺らぎを起こします。

従来から学校体育制度は、教育という文脈と、

スポーツが持っている遊びという文脈が重なる部分に存在していました。故に、不安定で常に揺らいできたわけです。

そういった中で、改めて体育が変わるのか、それとも、学校そのものが変わってしまうのかという議論の中で、私たちはこの体育社会学からどう考えればいいのかということを議論しなければいけないと思います。ただ、社会学自体にもやはり揺らぎがあります。最近、パブリックソシオロジーということが非常に指摘されますが、現場と伴走しながら、どのように考えていけばいいのか、より良い公共性を考えていけばいいのかという議論が必要だと言われています。

つまり、体育社会学という学問領域の中で、現場の教育とスポーツをいかに考え、より良い方向に導くのかということを、実践を伴いながら議論していく必要があるだろうというふうに、今回の話をいったんまとめたいと思います。高橋先生、ここで私の話を一度終わりたいと思います。

高橋：原先生、どうもありがとうございました。私の中で少しつなぎながら、次の高井先生に行きたいと思います。

私も、新型コロナウイルスでリモートになって以降、運動が減った感じがして、生理データが採れる時計をはめるようになりました。そうすると、毎日の歩数から心拍変動、眠りの判定、歩いた負荷などの情報が全て携帯に來ます。手に振動で刺激が来て、見ると、携帯が、「よかったですね」と言ってくれます。

要は、国の制度で強制的に体を動かされるような教育のシステムではなく、ある種、民間のシステムに取り込まれて、遊び感覚で体を動かすライフスタイルに変わったと実感しています。今話を聞いて、体育的なものと遊び的なものから体の動きが変わるとするのは、非常に感じました。どうもありがとうございます。続いて、高井先生、よろしくお願ひします。高井先生、ミュートを取って音声を入れてください。

問題提起：メディアから捉えた学校体育のゆらぎ

—テレビドラマにおける体育教師像の変容—

高井昌吏（東洋大学）

初めまして、東洋大学メディアコミュニケーション学科の高井です。よろしく申し上げます。原先生が、体育教育に関してすごく内面的な話をされました。私は、そもそも体育学あるいは体育社会学の研究者ではないということで、本当に外野からの、外在的な話にしかありませんが、どうかご容赦ください。

最初に、大きなテーマとして、「体育社会学は、『誰のために』、『何を目的として』営まれる研究であるのか？」とありますが、私にはそれは荷が重いということで、本日のテーマを放棄するような感じですが、今回はメディア表象ということで、すごくせまく設定しました。

テレビメディアの戦後に対象を絞ります。いわゆる学園ドラマに焦点を当てて、かなり手短かに話を進めます。その中で、体育教師、あるいは部活動の顧問の教師たちは、メディアの中で、誰のために、何を目的として描かれてきたかという形に問題を変換します。

レジュメにきちんと書いておけばよかったのですが、ざっくり言って四つの時代区分があります。一つ目が、1960年代あるいは1970年代の青春ドラマです。この辺りは年配の先生が私より詳しいと思いますので、情報をいただければ幸いです。その次が、1980年代、1990年代のドラマで、三つ目が2000年以降のドラマです。四つ目が現代です。そういったものを受けて、私たちはいかにして、どういったメッセージをそこから受け取ればいいのかという話です。

1. 関連するもの

関連するものはたくさんありますが、社会学にはおなじみのことなので割愛します。簡単に言うと、テレビドラマですから、テレビの普及が重要です。言わずもがなですが、1959年皇太子成婚パレード、1964年東京オリンピック

辺りで非常にテレビの普及が進みました。

二つ目に、学園ドラマの舞台としては、やはり高校の部活動がメインです。高校進学率は、1955年には51.5%でした。女子は半数には至っていません。これが、青春ドラマの始まる1965年には70.7%で、1975年には91.9%ということで、高校進学は大衆化を迎えました。

2. 日テレ系「青春ドラマ」(1965～79年)、 プロデューサー：岡田晋吉（ひろきち）、 制作：東宝

ざっと説明します。まず、日本テレビ系の青春ドラマを採り上げます。1965年から10年以上にわたって放映されました。さまつな情報かもしれませんが、放映時間は日曜日の夜の8時でした。日本テレビは隔週でプロ野球のジャイアンツ戦を放送していましたが、もちろん、ほかの局でもその間に巨人戦は放送します。ですから、巨人戦は、時には日テレのライバルであり、時には強力な味方でもありました。巨人戦とも戦わなければいけなかったし、裏番組にあったのがNHKの大河ドラマです。「青春ドラマ」は、1965年から1967年の間は、この二つの敵と互角に戦っていたという事実があります。

「青春ドラマ」の初期に三つの作品がありました。読み上げるのは大変なので、ポイントだけ説明します。簡単に言うと、まず、運動部の顧問ですが、体育教師は顧問ではありません。顧問は、基本的には英語教師です。しかも、海外帰りという設定が多いです。

年配の人はご存知かもしれませんが、第1作目の『青春とはなんだ』(1965年)(ラグビー・英語教師)の原作は石原慎太郎です。アメリカ帰りの野々村健介という教員が田舎の学校に赴任します。アメリカ帰りですが、生徒には、アメリカンフットボールではなくなぜかラグビー

を教える設定です。同じ年に、石原裕次郎主演で、日活で映画にもなっています。

『これが青春だ』(1966年)(サッカー・英語教師)は竜雷太が主人公で、英語教師がサッカーを教えます。『でっかい青春』(1967年)(ラグビー・市役所の体育振興係の職員→『高校の体育教員])で初めて体育教師が主人公になります。ただ、最初から高校教師が主人公だったわけではなく、まず、市役所の体育振興の職員という、非常に変わった設定でした。

結論から言うと、3作目の『でっかい青春』は、最初は視聴率がすごく悪かったそうです。途中から学園ドラマになり、市役所の体育振興員がいきなり英語教師になるのはおかしいということで、竜雷太が高校の体育教師になった話です。ですから、積極的な起用ではなかった感じでした。

描かれ方を簡単に言うと、上の作品までは、どちらかといえば超人的な教師です。何をやっても生徒には絶対に負けません。一方、体育教師は登場しますが、存在感は非常に薄いです。ラグビー部、サッカー部の顧問は、基本的に英語教師に奪われています。こういった構図をどう見るかです。

もちろん、親米、反米など、アメリカへの多様な意識がありました。当時は1960年代の後半ですから、ベトナム反戦や安保闘争がありました。ここでは吉見(俊哉)さんを引いてきましたが、それでも、日本人のマジョリティーは、戦後の日本の経済発展はアメリカのおかげであり、豊かさを理想としたい感情を持ち続けていたと言えると思います。

日本テレビとアメリカ的なものとの関係は深く、当時ならバラエティーもそうですし、プロレスもそうでした。佐藤卓己先生の『テレビ的教養——億総博知化への系譜』の議論にもありましたが、こういったものが、特に日テレによって追求されていた時代でもありました。

象徴的なシーンを一つだけ挙げます。これは『青春とはなんだ』の第1話のシーンで、生徒と野々村が会話をしています。生徒が、「先生、アメリカでいったい何を勉強してきたんですか」と言います。野々村(夏木陽介)は「一口

では言えねーが、俺が勉強したのは『アメリカ』っていうでっけー野郎そのものについてだ」と返答します。

これを聞いただけでは意味不明で、この人は何を言っているのかという感じですが、これは地方の古い高校が舞台なので、そういう古い秩序を破壊して、人々を導く教育者にふさわしいのが英語教師だったのではないかと思います。

簡単に言うと、これは「アメリカ」、「東京」、「地方」のヒエラルキーを表しています。何のヒエラルキーかという、文化でもいいし、経済でもいいですし、場合によっては政治でもいいかもしれません。こういった形のヒエラルキーが明確に見えました。

その後も青春ドラマはたくさんありますが、割愛します。顧問は英語教師の場合が非常に多いです。最後は1979年の『あさひが丘の大統領』(1979年)(ラグビー・英語教師)の辺りです。これも先祖返りをして、主人公はラグビーを教える英語教員です。

この辺りの後期の青春ドラマは、少なくとも高校が舞台ではなくなります。大学の寮や、就職後の若者がテーマになって、少し多様化していきます。『進め!青春』(1968年)(サッカー・社会科教師)以降は、超人的な教員というよりも、教師も生徒も共に成長する物語に変わっていきます。一方で、体育教員の存在感はあまりありません。

3. 「青春ドラマ」以降 (1980年前後～90年代半ば)

次の時代に行きます。1980年代から1990年代半ば辺りにかけては、テーマが部活ではないものも入っていますが、体育教員を中心に挙げました。

まず、『熱中時代』(1978年～1981年、2シリーズ・日テレ)の水谷豊です。これは小学校ですから、体育も教えます。ジャージ姿で登場することが多かったです。

次に、『3年B組金八先生』(1979年～2011年・TBS系、全8シリーズ)です。武田鉄矢は国語教師ですが、体育教師のインパクトはあまりありません。インパクトが強かった体育教

師は第2シリーズに登場します。写真が使えなかったのが、今日はお出せませんが、荒谷二中の清水とあって、竹刀を持ち歩いて、生徒に過度な暴力を加えます。こういう教員が出てきました。ですから、物語の中では、完全な悪役として描かれています。割と有名な曲で、中島みゆきの「世情」が流れるシーンに出てくる教師です。検索すればすぐに画像が出ると思います。

その次に、教師が主人公のドラマで、おそらく一番有名と言われている『スクール☆ウォーズ』（TBS系・1984年）（ラグビー・体育教師）です。間の「☆」はよく分かりませんが、当時、「つのだ☆ひろ」みたいだと思いました（笑）。TBS系です。ここで初めてではありませんが、体育教師がメインの主役となります。ただ、これも少し特殊なところがあり、一応、元日本代表のラグーマンということで、山下真司が滝沢賢治の役をやっていました。これは実話を基にしているということで、よく知っている人もいらっしゃると思います。オープニングナレーションは非常に有名です。「この物語は、ある学園の荒廃に闘いを挑んだ熱血教師たちの記録である。高校ラグビー界において全く無形の弱体チームが、荒廃の中から健全な精神を培い、わずか数年で全国優勝を成し遂げた奇跡を通じて、その原動力となった信頼と愛を、あますところなくドラマ化したものである」。

1980年代、1990年代辺りは、非常に面白い教師像が出てきます。1990年代に入ると、見た方もいらっしゃるかは分かりませんが、『高校教師』（1993年・TBS系）というドラマがありました。主人公は真田広之が演じた理科の先生ですが、非常にインパクトがある体育教員として、新庄徹という、赤井英和が演じていた役があります。

野島伸司ドラマなので当たり前ですが、ここに出てくる教員は非常に駄目な人ばかりです。この人は剣道部の顧問の体育教員で、体罰で懲戒免職をされた過去も持っています。暴力を振るうことも結構ありますが、正義感や思いやりも非常に強い教師です。結局、この人は同僚の教師を殴り、自分も教師を辞職し、建設会社に就職して現場作業員になります。不器用ですが、

非常に真つすぐな信念を持ち、生徒思いという描かれ方です。

この時代は、英語教師は後景化していきます。英語教師だからといって顧問になるというドラマはなくなっていきます。牧歌的な青春ドラマとは少し距離を取っていて、青春ドラマは親米的でしたが、親米でもないし、反米でもありません。

この辺は説明しづらいですが、ドラマの中では学校の秩序が乱れているので、それを正さなければいけません。かといって、山下真司の場合は、いろいろと生徒に命令をして主体性をなくさせるというのではなく、生徒に主体性も与えます。こういった感じのバランスを取りながら進んでいたことから、ある程度名作とされている理由かと思います。

ですから、体育教員の描かれ方としては、1980年代、1990年代辺りからは非常に多様だったと思います。学校問題解決者の山下真司と、学校問題そのものあるいは暴力教師としての荒谷二中の清水、中間型という言い方はあまりよくありませんが、非常に葛藤し、もがき苦しみ、うまくいかない赤井英和。そういうさまざまな描き方がされている時代です。

4. 2000年代の教師ドラマ（1980年前後～）

「Ⅲ」は2000年代のドラマです。これもいろいろと採り上げていますが、結論から言うと、体育教員はあまり強調されていません。『GTO』（1998年、2012年・フジテレビ系）でも『ごくせん』（日テレ系・2002年、2005年、2008年）でもそうです。『ドラゴン桜』（2005年・TBS系）、『女王の教室』（2005年・日テレ系）でもそうです。代表的なものだけですが、『ROOKIES』（2008年）は国語教師です。そういった感じです。

2000年代以降、体育教師はかなりステレオタイプ化しています。例えば、熱血漢であるとか暑苦しいとかで、しかも、後景化していることが一つのポイントだと思います。要するに、山下真司や赤井英和ほどの存在感はなくなっています。

でも、一貫性があると思うのは『スクール☆ウォーズ』からです。青春ドラマは少し違います

が、ドラマを見ると、体育教師の共通する描かれ方は、不器用な人間という印象を持ちました。

5. 現代社会が抱える問題と教師ドラマの可能性

「Ⅳ」です。だいぶ短くまとめますが、現代社会が抱える問題と教師ドラマの共通の可能性みたいな感じです。これまで、たくさんの教育問題、学校問題がテレビドラマで描かれています。いじめ、受験戦争、非行、校内暴力などです。2000年代以降の新たな学校問題も、もちろんあります。私は門外漢なので思い付きですが、モンスターペアレンツ、発達障碍、学校裏サイト、格差社会があります。貧富の格差が、そのまま教育格差になるという話もあります。

ここから強引に体育教師像に引き付けるのは難しいですが、こういった問題に立ち向かい、葛藤する体育教師の物語が、果たして構築できるのかということです。私には答えが出てきませんが、ヒントとして二つだけあると思います。

「ヒント①」は、大澤真幸さんの『不可能性の時代』という本から取ってきました。これは大澤さんの時代分析です。「現実からの逃避」と「現実への逃避」があります。普通、私たちが呼んでいる現実逃避は現実から逃げることで、大澤さんが強調しているのは「現実への逃避」のほうです。

身体は本当に信じられるものです。自分で自分の体をたたいたりつねったりしたら痛いですし、間違いなく信じられます。SNSで「いいね」をもらっても、それはそれでどうなのかと疑いの目を持つ人もいます。身体が重要になって、例えば、健康オタクであるとか、災害ボランティア、対面のコミュニケーション、海外留学などの実体験こそが重要という形に流れてきます。要するに、肉体や身体を伴った移動、野外活動で、非言語的なコミュニケーションと、体育や部活は親和性が高いと思います。

こういったことをドラマに活かせるかということ、私はプロデューサーでも何でもないので、活かすことはできると思っています。新型コロナウイルスの問題も、教育現場では非常に大切だと思います。これは言わずもがなで、皆さんもご承知のことだと思いますが、新型コロ

ナウイルスのすごく大きな特徴は、基本的に人間と人間の接触を断つことです。もちろん、こういうオンラインでの接触は断ちませんが、そういったものを、体育あるいは人間教育にどのように導入すればいいのかということは、何の答えにもなりません、ヒントにはなると思います。

「ヒント②」はもう少し大きな話になります。北田暁大の『嗤う日本の「ナショナリズム」』（NHK ブックス）という本は、2000年代に非常にヒットした、彼の代表作です。近年、北田さんは左派知識人たちに対して攻撃的です。具体的には上野千鶴子、内田樹、高橋源一郎、小熊英二たちのことを、結構こてんぱんに言っています。北田さん自身が非常にまじめになっている感じがします。体育からはずれませんが、移民政策について、北田さんは、「彼らは、日本の経済は何だかんだいって大丈夫でしょうと、根拠もない自信を持っている。一方で、ロスジェネは無視している」といった感じで痛烈な批判をしています。

一方、教育業界や体育に目を向ければ、非常勤教員の問題があります。もちろん、常勤、非常勤の問題、あるいは雇用形態の問題は、社会でも非常に大きくなっていますが、こういった苦境を抱えながらも、生徒と共に格闘する物語も、体育教師のドラマなのか教師ドラマかは分かりませんが、もしかしたら構築できるのかもしれない。

ですから、今私たちが求めているのは、青春ドラマのような、割と牧歌的な学校の先生、顧問でもないし、『スクール☆ウォーズ』的なものでもないと思います。赤井英和が示したような、すごく不器用で、もがき苦しむ社会的弱者の方が、望ましいでしょう。信頼感の強さや正義感の強さが求められていると思います。こんな形で、非常にまとまりのない、さまつな発表になりましたが、以上です。

高橋：高井先生ありがとうございます。私も全ての学園ドラマを観たわけではありませんが、スポーツが部活動として描かれたり、学校の問題の中に体育教師が出てきたり、最近では、そもそも体育や部活が問題にすらならないほど、学

校のほかの問題がドラマになっていることがよく分かりました。また、部活が中心であって、体育の教師、体育の授業はほぼ取り扱われず、ノーマルな体育の先生は本当に見られないとい

うことがよく分かりました。ありがとうございます。それでは、市井先生、続いてお願いします。

新たなスポーツの潮流と学校体育のゆらぎ： ライフスタイルスポーツ・パルクール・スポーツ化

市井吉興（立命館大学）

市井です。今日はよろしくお願ひします。今回、私に与えられたテーマは、「新たなスポーツの潮流と学校体育の揺らぎ」です。1年前の日本体育学会大会の「前日研究会」のときも同じものです。しかし、台風で流れた「前日研究会」がこういう形で復活するにあたって、研究会の主催のほうから、体育社会学について、「誰のために、何を目的にしているのか」ということを付け加えて議論したいということを言われました。1年前はそのようなことをまったく考えていませんでしたが、今回はその辺りも含めていろいろと議論ができればいいと考えています。

1. 新たなスポーツ潮流とは？

まず、新たなスポーツ潮流について、簡単に整理したいと思います。私はここでは、「(1) ニューススポーツ」と「(2) ライフスタイルスポーツ」の二点について話します。

(1) ニューススポーツ

先ほど、原先生の報告で、新しいスポーツ潮流といったときに、世界ゆるスポーツ協会やeスポーツなども入ってきますが、この辺りは、今回の私の資料には入っていません。主に、これまでに皆さんが議論してきたニューススポーツと、最近、私が研究を中心に行っているライフスタイルスポーツの二点について話します。

(1-1) ニューススポーツに対する関心の現れ方

ニューススポーツに対する関心の現れ方ということで、まず、ニューススポーツというものが一般の人に知られるようになったのは、1970年代の後半からという指摘があります。つまり、一般のメディアが「ニューススポーツというのはこういうものですよ」ということが書かれるよ

うになったのが、1970年代の後半です。

実際にニューススポーツをつくり始め、体育または社会体育やレクリエーションで取り扱いたい、取り扱うべきだという議論についてはもう少し早く、1970年代の初頭だったと思います。

ニューススポーツが1970年代後半ぐらいから一般のメディアでも紹介されるようになり、さらに、ニューススポーツがこれからのスポーツ、または地域のコミュニティづくり、地域の健康増進といったことに役に立つということが分かってきます。その背景には、日本の高齢化の進展がありますが、そういった中で、レジユメにも書いたように、1988年に当時の文部省体育局に生涯スポーツ課が新設され、ニューススポーツの普及を推奨しました。ニューススポーツへの関心は、そこからぐっと高まりました。

さらに、ニューススポーツが大きな飛躍を遂げるきっかけになったと思われるのが、通商産業省産業政策局の「スポーツビジョン21」（1990年）です。これまで、これについては、スポーツ関係者がいろいろと議論してきましたが、この中で、ニューススポーツは新たにスポーツ振興の対象とされ、さらに新しいものをどうつくっていくのかということも含めて、政策的に実践されていきます。また、ニューススポーツの中に、あとで話すライフスタイルスポーツも含まれると記されています。

(1-2) ニューススポーツの捉え方

ニューススポーツとはいったい何かということですが、スライドに野川春夫先生、師岡文男先生、北川勇人先生など、さまざまな先行研究者の主張を整理しました。簡潔に述べますと、ニューススポーツとはいつでも、どこでも、誰もができる簡単なスポーツで、また、今まで日本にはなかったのですが、日本に入り、紹介され、

広まってきたスポーツを指します。

日本に入ってきたものは、例えば、海外で新しくつくられたものも入りますし、また、歴史的に古いものもあります。セパタクローなどは、歴史的には古く、かなり昔からあるものですが、日本に入ってくると、今まで見たことがなく、新しいということでニューススポーツとなります。

ただ、次のライフスタイルスポーツとの関わりで見ていくと、レジユメの「(1-2) ニューススポーツの捉え方」の真ん中ぐらいの、「野々宮(2000)の場合」という所を書きましたが、「①アメリカのカウンターカルチャーの影響を受けたものとしてニューススポーツを捉える」という見方があります。

この辺りは、レジユメで「長谷川(2011)や早川(1992)の指摘」、つまり、「ニューススポーツには近代スポーツ批判という視点がある」と書きましたが、カウンターカルチャーの影響を受けたニューススポーツとは、従来のスポーツである近代スポーツを批判し、自分たちで新しいものをつくろうということで誕生してきたものという捉え方もあります。

また、先ほど、ニューススポーツが地域の健康増進、コミュニティ形成、高齢化に伴う高齢者の健康づくりという視点でも捉えられると言いましたが、これは、レジユメに記した「野々宮(2000)の場合」の「②ノルウェーから西ドイツを経由し、日本に持ち込まれた『トリム運動』をニューススポーツの源流とする」という点を反映しています。

(2) ライフスタイルスポーツ

(2-1) ライフスタイルスポーツの捉え方

続いて、「(2) ライフスタイルスポーツ」に話を進めます。スライドには、私がサーフィンをしているときの写真が載っています。こういった新しいスポーツ、例えばサーフィンですが、そのルーツをたどっていくとハワイ・ポリネシアにたどり着くのですが、サーフィンが一つの若者文化として広まっていくのは1960年代ぐらいだと思います。

ライフスタイルスポーツは、1960年代のアメリカを中心に、さまざまな新しいスポーツと

して登場します。しかし、ライフスタイルスポーツも、新しいスポーツをカテゴリ化する一つの言葉であり、ライフスタイルスポーツ以外にもいろいろな言葉があります。レジユメに示しているように、「エクストリームスポーツ」、「アクションスポーツ」、「オルタナティブスポーツ」、「パニックスポート」、「リクスポート」などなど、さまざまな名称が付けられています。

ですので、レジユメにも書いたように、上記を踏まえると、例えば「サーフィン」というスポーツを、ある人は「ライフスタイルスポーツ」と言い、別の人は「エクストリームスポーツ」と言い、さらに別の人は「アクションスポーツ」と言うように、同じスポーツですが、三者三様にさまざまなカテゴリーを当てはめ、その特徴を示そうとします。あえて言うなら、不思議な現象です。不思議ではありますが、カテゴリー、名称が多様であるということがそのスポーツの魅力をどのように伝えるか、カテゴリー化することによって、変な言い方かもしれませんが、ビジネスと結び付くものであれば自分たちの商品をどう売り込んでいくのかということと密接に関わっているので、カテゴリーの多様化というのは面白い現象ではないかと、私は個人的に思っています。

では、こういったカテゴリーが多様化していることについて、どう交通整理したらいいのか、何らかの形で一本化したほうがいいのかという議論になりがちですが、個人的には、私はそこら辺はどうでもいいと思っています。つまり、「一本化してみんなこれから『ライフスタイルスポーツ』という名称で統一しましょう」というようなことは、私は全く考えていません。むしろ、「多様化したままで、好きなようにそれぞれのスポーツを語ってくれ」というほうが、私はいいような気がしています。

ただ、そうは言っても、自分が「ライフスタイルスポーツ」という言葉を使って、こういった新しいスポーツを研究の対象としているので、その辺りについて、「(2-2) ライフスタイルスポーツの誕生の背景とその特徴」で、その理由を説明させていただきます。

(2-2) ライフスタイルスポーツの誕生の背景とその特徴

ライフスタイルスポーツの誕生の背景には、やはり1960年代のカウンターカルチャーの誕生とその発展が大きく関わっています。カウンターカルチャーについては、さまざまな説明の仕方があると思いますが、簡単に言ってしまうと、近代社会の矛盾に対する若者たちの反抗です。近代社会の矛盾というのは、例えば管理社会、簡単に説明するならば、自分たちが社会の歯車として再生産されていくプロセスに乗せられる、あたかも、レールが引かれてその上を歩かされていくのが嫌だという反抗です。

また、1960年代は経済成長が著しい、日本で言ったら高度経済成長期です。そういった経済発展、工業化の発展に伴う生活環境、自然環境がおかしくなってきた、そういったものに対する反応ということも含めて、近代社会の矛盾がいろいろ現れてきます。そういったことに対して、「私たちが生きている今の社会は何かおかしいぞ、何なんだ、これは？」と疑問を抱き、さまざまな抵抗運動、反対運動が起こってきました。

こういう文脈の中でスポーツに対しても何らかの批判がなされます。それが「近代社会の矛盾の象徴として近代スポーツがある、これを何とかしたい」となります。それでは、どのように近代スポーツを批判していくのかというと、近代スポーツはいわゆる「業績達成型スポーツ」—これはレジюмеで示したように、アイヒベルグが提示した「アチーブメント・スポーツ」の訳ですが—一であって、「より高く、より早く、より遠くへ」といったスローガンに象徴されるように、1分1秒、記録を常に塗り替えていく、そこに挑戦していく人間こそ美しいというスポーツの在り方って、それでいいの？となります。このような若者の批判が「ライフスタイルスポーツ」に反映されていきます。つまり、若者たちは、その当時の支配的なライフスタイルに対して、「嫌だ」と意思を表明し、自分たちがスポーツを通じてどのような生き方、社会との関わり方をしたいかを考え、ライフスタイルスポーツにその意思を反映させたと思

います。

その点が、レジюмеに示した「スポーツをアイデンティティー形成、ライフスタイルの構築や表現のプラットフォームとして位置付ける」ということになります。つまり、「ライフスタイルスポーツ」という名称を私が使うのは、そういった社会的背景の中で、若者たちが自分たちの生き方、アイデンティティー、またはスポーツを通じて、アイデンティティーを形成しようとしたというところに力点を置きたいからです。

次に、ライフスタイルスポーツの精神はDIY (Do It Yourself) であり、自分がやりたいことは自分でやる、ということに特徴があります。確かにその当時、アメリカにも若者に人気のあるスポーツがありましたが、「私たちがやりたいことは今のスポーツではない、ないんだから作ってしまえ」ということが、このライフスタイルスポーツのDIYの精神の具体化となっています。それ故に、ライフスタイルスポーツへの関わり方は、「やりなさい」と言われて、やるのではなく、自分から積極的に参加していく、コミットメントしていく、まさに個人の自由意思を尊重することに特徴があります。

ライフスタイルスポーツは、様々な議論の仕方がありますが、先のように若者が立ち上げて、若者たちがつくってきた文化です。それが「商業化」していき、一つの市場を形成していきます。また、これを機に、「私もやってみたいな」と思う人々が増えていきます。かつて、ライフスタイルスポーツの道具は高価でしたし、ライフスタイルスポーツへの参加は、経済的なゆとり、時間的なゆとりに左右されていました。そのような問題もありましたが、今では、幅広い層に支持されているスポーツになっています。

東京オリンピックは延期になりましたが、今回の東京オリンピックではライフスタイルスポーツの種目が多く採用されました。まさに、ライフスタイルスポーツはIOCから大きな注目と期待を集めています。このままライフスタイルスポーツ全般について話を続けていくわけにもいかないので、ライフスタイルスポーツの中でも、次に、バスケールについて話をしていきます。

2. 「パルクール (Parkour)」とは何か

2-1. パルクールの歴史：誕生・背景・現状

さて、パルクールですが、これは1980年代に、フランス・パリ郊外で生活する若者たちの「遊び」から誕生しました。また、パルクールのルーツをたどっていくと、その動作は1900年代初頭にフランスのエベルが開発した軍事教練のスタイルとよく似ていると言われます。

パルクールは、今でこそ、一般化された名称になっていますが、もともとは、「移動の芸術 (art du déplacement)」という呼ばれ方や、また、「進撃のコース/進路 (parcours du combattant)」というフレーズで用いられる「パルクール (parcours)」という言葉も使われていました。現在、パルクールはフランスを超えて世界各地に広がっており、フランス以外では、イギリス、アメリカが非常に重要なパルクールの拠点になっています。

今では、インターネット、SNSを通じて世界中に拡散していますし、そういったものを通じて、例えば日本の若者がパルクールをやるとき、日本の国内でやっているのですが、自分自身のパフォーマンス動画を撮影してSNS上に上げて、そのパフォーマンスや技に対して世界中からコメントが寄せられ、そのコメントを参考にして、さらにパフォーマンスを磨いていくというやり方が進んでいます。このようなやり取りの場は、まさにグローバルなコミュニティーと言ってもいいでしょう。

また、パルクールの動作はスポーツのみならず、さまざまな領域からも注目を集めています。シルク・ドゥ・ソレイユのような舞台パフォーマンス、映画にも採り上げられたりして、注目度が非常に高くなっています。

2-2. パルクールの特徴：理念・プレースタイル・多様な実践者

次に、パルクールの特徴について簡単に話します。まず、パルクールの実践者は「トレイサー (traceur)」と称されます。トレイサーたちは個人で活動している人も居ますが、大体は小集団のチームを結成し、チーム名を付けて、

そこに集まった人たちでお互いに技を教え合うスタイルを採っています。トレイサーたちは、自分たちのパルクールをどのように認識しているかという点、「パルクールはスポーツだと思っていない」、「パルクールはパルクールでしかない」と、なんか禅問答みたいな感じになっていますが、「とにかくパルクールはスポーツではない」と。じゃあ、「その理由は何だ?」と問いかけると、「パルクールは誰かよりうまくなる、競い合うというようなものではない。つまり競争はない」という返答がなされます。トレイサーの多くは、(近代)スポーツの特徴を「競争」に見出だしているのだから、「パルクールは競争がないからスポーツではない」という認識が共有されています。

また、パルクールに大切なことは、「身体的・精神的な限界を明らかにし、それを乗り越えるためにチームのみんなまで協力し合いながら努力する」という点が強調されています。

2-3. パルクール vs フリーランニング：どちらが本物?

次に、「パルクールとフリーランニング、どちらが本物か?」という話をします。先にも述べましたが、パルクールは1980年代のフランスで登場しました。当初は「移動の芸術」または「進撃のコース (parcours)」という名称を用いていましたが、メディアに登場し、注目されることによって、自分たちの特徴を売り込むにあたり、移動の芸術とか進撃のコース (parcours du combattant) という呼び方を変えていき、「俺たちはパルクール (Parkour)、中身はこう」、「俺たちはフリーランニング、中身はこう」というふうになり、さまざまに分化していきます。その分化をめぐる研究者間でもさまざまな議論がありますが、「自分たちがやっているのはパルクールなのかフリーランニングなのか」という点については、トレイサーたちの間でも論争が続けられています。

2-4. パルクールのスポーツ化：その課題と論点

2-4-1. スポーツ化の発端

それでは「パルクールのスポーツ化：その課

題と論点」について話します。パルクールは若者に非常に人気があるので、例えば、学校の中で若者に生き生きとしてほしい、地域でも若者が元気でいてほしいので、「パルクールを学校教育の現場でも地域のコミュニティスポーツの一つとしてもやっていきたいけど、どうやったらいいのかよく分からない」という意見が教育関係者、行政の関係者から出されます。たしかに、パルクールの可能性はよく分かるが、これをどういうふうに教えたらいいのか、パフォーマンスを向上させるにはどうしたらいいのかが一切分からない。また、トレイサー同士で教え合っているのがパルクール独自の文化であることは分かるが、それを一般化する、普遍化するのなかなか難しいようなので、パルクールに関心を持っている人々は困ってしまいます。

実際、パルクールのパフォーマンスもかなりアクロバティックな動きもあるので、これを学校でやって怪我をしたらどうするのか、リスク管理の面から言っても、「パルクールは魅力があるけどどうしたらいいか分からない」というお手上げの状態が続いてきました。そうした中で、これをスポーツとして扱う方向で話をまとめようという動きが、イギリスで早い段階から出てきました。

2-4-2. パルクールのスポーツ化：イギリスの場合

イギリスでは、スポーツイングランドに認可される競技統括団体として、パルクール UK が創設されました。先にも述べましたが、パルクールは、トレイサーがそれぞれチームをつくって、そこで教え合っています。たしかに、そのような実態も一つのパルクールカルチャーです。しかし、パルクールを一般化するために、スポーツ化を進めました。つまり、パルクールを統括する団体があり、そのもとでパルクールのスタイルの確立、指導資格、何かあった場合のフォローもしっかりやるということで、パルクール UK をつくりました。実際、パルクール UK のもとで、指導者の資格化を進め、リスク管理を徹底していきました。

この動きに対して、「その話に乗った」というトレイサーも居れば、「そんなの嫌だ」と言って全く関わらなかったトレイサーも居ました。そういった状況も非常に重要な論点になっています。

2-4-3. スポーツ化は成功したのか？

はたして、パルクールのスポーツ化は成功したのかというと、うまくいったとも言えるし、うまくいっていないとも言えます。歯切れが悪くて申し訳ありませんが、なかなか難しいところがあります。スポーツ化を進め、指導者の資格化を進めたとしても、「パルクールとは、本当にスポーツなのか？」という多くの人の疑念はまだ払拭されていないというのが現状です。

また、パルクールをする人たちの服装を含めたスタイル、これは、街の中でたむろしてストリートでパルクールをしている人たちを調査したときの写真—スライドで紹介—です。「若者が夜に集まっているけど、あれ、何やってるの？」ということで、これをぱっと見て、「スポーツをやってるな」と思ってもらえる感じではなさそうですね。それゆえに、パルクールをスポーツ化する、指導者の資格化を進め、パルクールをする場所を設定していくことは、むしろ、こういったストリートでやっている、スポーツなのか、どうなのか、訳の分からないパフォーマンスを公共の空間から「締め出していく」という見方もできると思います。

3. パルクールの「未来」： 新しいスポーツの「ジレンマ」

一言で言うと、パルクールは今、非常に熱いまなざしを向けられているスポーツであり、オリンピックの公式競技として狙われています。こういった中で、パルクールをオリンピックの公式競技にするために、様々な人たちが動き始めました。それに対して、トレイサーたちも乗る方向で動いている人たちも居れば、それに対して批判的な人たちも居ます。時間の都合でかなりはしょってしまい申し訳ありませんが、この点については、質疑でフォローさせていただきます。

4. まとめに代えて

最後に、「体育社会学は、『誰のために』、『何を目的として』営まれる研究であるのか？」という問いに対して、その解答に向かう、自分の考えをお話しさせていただきます。

体育社会学会では、10年に一度ぐらい、「体育社会学とは何だ」というのが、シンポジウムや、それをテーマにした論文が書かれています。今回の研究会の発表を準備するにあたり、そういったもの—レジュメに記した井上俊先生、今村浩明先生、菊幸一先生、佐伯年詩雄先生の論文—を読み、自分なりに整理しました。「体育社会学の対象は、教育の手段としての身体活動であり、この点を忘れてはいけない」ということが、先生方の議論の中で何度も繰り返されてきて、ここが今回の研究会での論点でもあるかと思います。

であるならば、私が今回報告したニュースポーツや、その文脈にあるライフスタイルスポーツ、新たなスポーツ潮流を、教育の手段と

しての身体活動として、これまで体育社会学はどう位置付けてきたのか、どういう扱いをしてきたのかというところを、今一度検討する必要がありますのではないかと思います。となると、レジュメの最後に書きましたが、「新しいスポーツ潮流を『教育の手段としての身体活動』として位置付ける試みを通じて、先の大きなテーマ／問いへの回答が導かれるのではないだろうか」と考えています。

「じゃあ、あなたの解答は？」と言われたら、即答しかねますので、質疑の中で考えてみたいと思います。恐らく、この「新しいスポーツ潮流を教育の手段としての身体活動として位置付ける試み」は、今日の報告で言えば、原先生の最後のほうの新しい身体スポーツに関わる身体の捉え方と、そのコンテンツとしての新しいスポーツの多様化ということとも結び付くのではないかと思います。

いろいろと話がとっ散らかり、時間も守れないところがあり、すみませんでした。私の報告はこれで終わります。ありがとうございました。

質疑応答

高橋：市井先生、ありがとうございます。バルクールの事例をいただきましたが、例えば、スノーボードとかは既に教材化され、体育で冬に学校で教えています。しかも、教材化するためには教師の指導能力も同時並行的に育てなければいけないと思いますが、体育教師はそれができなくて、スキー学校の人たちに生徒を丸投げするみたいなことで成立させています。

新しいスポーツをどう採り込むかということでは、採り込み方にも幾つか事例がありそうな感じがしました。ありがとうございます。

参加の皆様からも、このあと意見を受けていきたいと思います。まず三人の先生方同士で幾つか既に質問が、原先生から質問が出ています。これは市井先生宛てです。「ライフスタイルスポーツが近代スポーツ批判を背景としてできあがっている」という発言のところですが、「学校体育の前提にある近代教育に採り込むことは可能でしょうか」みたいなことが、チャットを見てもらうと出ています。

市井：今見ました。これは答えるのが非常に難しい質問です。

高橋：どうでしょう。

市井：何とも言い難いです。確かに、「ライフスタイルスポーツは近代スポーツ批判を背景にしている」というのは、私が今話したとおりです。「学校体育の前提にある近代教育に採り込むことが可能なのか」といったときに、すぐに「できます」、「できません」とは、私自身も答えにくいところがあります。

なぜかという、恐らく今日の原先生の発表で、学校が変わるのか、体育が変わるのかという議論があったと思います。そういったことも含めて考えていかないと、「あなた、逃げてる」と言われるかもしれませんが、私だけではちょっと荷が重いので、またいろいろと今日のところで話を進めたいと思うのが、私の第一の

感想です。

「距離をおくべきなのか」というのは、恐らくそういう見方もできるでしょうが、では、学校でやらなくていいのかというと、やってみてもいいのか、でもやるときに、いきなりその学校教育の体育の現場というよりは、学校の特徴を出していく、学校経営とも関わるかもしれません。それ故に、部活動とか同好会活動から始めてみるのも「あり」かなという感じはしています。

ただ、これはやはり原先生のテーマとも関わらせて、皆様といろいろと議論したいと思っています。以上です。

高橋：原先生、いかがですか。

原：ありがとうございます。めちゃくちゃ考えなければいけないけど、難しいというのと、やはりパブリックスクールの中にラグビーが入ってきたこととか、歴史の中で、思想と実際にやるスポーツをどう関連づけて考えていくかは大事だと思って聞きました。

高橋：ありがとうございます。私も今チャットを入れましたが、最近の流れだと、要は商業化、ライフスタイルスポーツ側も競技団体とかスポーツ化した瞬間に商業的なマーケティングの力が働きます。そうした場合に、市井先生が指摘したように、初期投資としての費用がかかる部分には、既に、「協会として物品は提供します」みたいな形で学校に近付いています。

特にeスポーツなんかは、「パソコンやソフトは無料で貸し出します」みたいなことを、既に部活動を開始する学校にサポートするみたいな形で商業的なパワーが働きます。実は、日本の場合は、高校だったら100%に近くその年代の人に接点を持てるという大事な消費者の接点です。そうしたところで接触してくるのではないかと感じたので、チャットに入れました。

高橋：市井先生、何かありますか。部活動にスポーツが、まずは来るんじゃないかという話でしたが。

市井：そうですね、来てもおかしくないとは思いますが、でもそこで今、高橋先生が言われたような形で、じゃあ、「そこの高校の部活動でライフスタイルスポーツを始めたぞ、行くか」というふうになるかということ、そこはなかなか手を出しにくい気もします。

これまでのスポーツの関連でいくと、リスク管理というところでなかなか難しいということで、「学校の部活でスタートしてもいいのでは」と言いましたが、一つのきっかけにはなると言います。「でも、これって何なの、スポーツなの？ちゃんとサポートしてもらえるの？」、それは行事の問題もそうですし、けがをしたときとか、協会的に何かそういうのがあって、サポートができていいのか、学校現場としても非常に気になることです。

「そういうのではないけど、今、はやってるんですよ」という学生の熱意だけだと、うまくいかないところもあります。「そんなの、自分たちでやれよ」の一言で終わってしまいそうな気もします。なかなかそれは難しいところだと思います。歯切れが悪い答えですみません。

高橋：ありがとうございます。それから、原先生から高井先生への質問です。「ドラマに描かれる体育教師のスポーツに関わるパフォーマンスレベルはどのように描かれるのでしょうか。さまざまな入試がスポーツ推薦になり、教員採用試験でもアスリート枠がある体育教師ですが、教育委員会が求めている人材像と表象の中で求められる人材像のずれはどのように考えていけばよいのでしょうか」ということです。高井先生、いかがでしょうか。

高井：まず、私は門外漢ですので、とりあえず教育委員会が求めている体育教員の像は分かりませんが、テレビドラマレベルで言うと、もはやパフォーマンスレベルというよりも、記号みたいな感じになっていると思います。

例えば、先ほど採り上げた『スクール☆ウォーズ』の中では、山下真司は元日本代表のラガーマンです。ですから、スポーツのシーンは、もちろんオープニングには出てきますが、

少なくとも物語の中ではあまり出てきません。むしろ、無用な場面が多いです。例えば、こんなトレーニングをしても何の意味もない、つらい、うさぎ跳びとかが実際一番分かりやすいと思います。何の修業なのかよく分かりませんが、取りあえず泣きながらうさぎ跳びをやるシーンがあります。

あとは、『ドラゴン桜』というドラマに関して言うと、体育教員ではありませんが、バスケットボールのものすごいロングシュートを決めるシーンがあります。実際の体育パフォーマンスは一つの記号です。教育委員会のことはよく分かりませんが、その辺りはかなり乖離していると思います。

ただ、制作者側の意図は分かりませんが、恐らく最初から合わせようとはしていないだろうなと思います。むしろ合わせないところに、ドラマとしての面白みがあります。異次元の形で、答えになっているかどうかは分かりませんが、私からは以上です。

高橋：原先生、いかがでしょうか。

原：ありがとうございます。パフォーマンスがある意味記号であるというのは、なるほどと思いました。スポーツ推薦で大学まで進学し、そのまま全国レベルの入賞経験があるので、採用試験を一次免除されて教員になっていくような体育教師のルートもあります。ある意味、高いパフォーマンスを発揮する人は、体育授業の中で高い教育効果を生み出すということがないと、そういう仕組みは作れないと思います。一方で社会や子どもたちの側からすると、先生がすごく高いパフォーマンスを見せてくれるということに、どれだけ意味があるのかということ、気になりました。

そういう意味では、表象されるような記号と、求められている記号とのずれみたいなことは、新しいスポーツを取りこんでいくときも、いろいろ考えなければいけないと思いました。

高橋：ありがとうございました。私も高井先生に単純な質問ですが、いわゆる学園ドラマの

中で採り上げられるスポーツが、なぜラグビーとかサッカーなんでしょうか。例えば、日本だったら高校野球だとか、もっとメジャーなスポーツがあると思いますが、なぜラグビー、サッカーなのか、かつ、こういうドラマを見る世代は、大河ドラマと対抗しているわけですから、どんな人が見ているんですか。このドラマを見たから体育教師になりたいという子どもが育つわけでもなさそうな感じもします。どんな世代が見ているのでしょうか。

高井：言えるのは、恐らくどんな時代であっても、学園ドラマの視聴者がある程度若者中心というのは間違いないと思います。特に、青春ドラマに関して言うと、やはり裏が大河ドラマをやっていたからというのは、もちろん重要です。

野球じゃなかったのも非常に面白くて、それもやはり裏番組との関係もあると思います。裏がジャイアンツ戦をやっていることがほとんどなので、ジャイアンツ戦の裏に高校野球のドラマをやるのが果たしていいのか悪いのか、挑戦的な試みではあると思いますが、それはプロデューサーも一切触れていません。ただ、やはり当時、ラグビーとかサッカーのほうが目新しさはあったという印象は持っています。答えになっているかどうかは分かりませんが。

高橋：なるほど、そういう力学も働くということがよく分かりました。ありがとうございます。ほかに、パネラー同士の質問はありますか。市井先生からの質問とか、高井先生からの質問とかありますか。先ほど、原先生からの質問は採り上げたので、いかがでしょう。何かありますか。

それでは、今日、参加の皆様からの質問を受けてみましょうか。ぜひ皆様からのコメント、質問で構いません。オンラインでの操作がなかなか難しいのですが、大量に参加されているので誰が手を挙げているのかわからないのです。ミュートを解除して名前を言って、コメント、質問をお願いします。どなたからでも構いません。よろしくをお願いします。どうぞ、名前を

言ってからお願いします。清水先生、入っていますか。どうぞ。

清水：清水克郎と言います。三つの面白い話を聞かせてもらってありがとうございました。まず、一つは、高井先生に伺います。青春ドラマのことですが、私も1960年代の『青春とはなんだ』からずっと見続けていましたが、非常に面白い話をありがとうございました。体育の先生だったのかなと思っていましたが、英語の先生が多かったということに初めて気が付きました。そういえば、普通、中学や高校の先生も、やはり英語の先生や数学の先生が主に顧問をしていることもあると思います。

ラグビーがイギリスのものだとか、やはりサッカーもラグビーもイギリスの影響が、ある程度スポーツの中にあるのだろうかということが、まず一つです。ラグビーの精神がイギリスのものであるということで、ラグビー発祥のラグビー校のことから、そういうことと青春ドラマとの関係はどの程度あるのかということも、まず一つ伺いたいと思います。

それから、日本の剣道とか武道が対象になった場合、森田健作千葉県知事の『おれは男だ!』とか、剣道がスポーツドラマの先生で、剣道も大きく題材になり、柔道もそうです。剣道、柔道という武道が題材になったときと、サッカーやラグビー、野球というのは思ったより少ないんだなと思いましたが、私はスポーツ関係のジャーナリストですので、その点から伺いたいと思います。

高橋：ありがとうございます。高井先生、いかがでしょうか。

高井：ご質問、ありがとうございます。まず、野球じゃなかったというのは、非常に面白いく所です。まず最初の、『青春とはなんだ』という1965年の作品です。これは石原慎太郎が原作ですが、本当に設定がなめていて、アメリカ帰りのスポーツマンですが、ラグビーを教えます。これは、アメリカンフットボール部がないからラグビーを教えるのか、何だか理由がよ

く分かりません。

でも、ご指摘いただいたように、取りあえずイギリスのスポーツ、サッカーあるいはラグビーが中心というのが一つあります。武道系、例えば『おれは男だ!』は剣道ですが、実はあれは原作が少女漫画です。『青春とはなんだ』の原作は漫画ではなく、しかも小説のほうがあとに出版されています。小説を書いたのは石原慎太郎ですが、脚本がまずありました。ドラマでヒットしたから、それを小説にして出したという、そうしたメディアの力学みたいなものは今日の話では外してしまったんですが、小説、漫画、テレビドラマ、そういったトランスメディア的な点が重要だと思います。

二点目は、やはり英語教師が多いというのが非常に特徴で、そこも中心として述べましたが、やはり何かしら新しいものを求めていたというのはあると思います。当時の青春ドラマ的な大衆文化と、一般の大学生は違っていたと思います。大学生だけではありませんが、一般社会であれば、70年安保とか、ベトナム反戦とか、反米的なものが非常に多かったのですが、だから野球が外れたのか分かりません。それはさておき、その一方で、純粋にアメリカ文化に対する憧れが一般大衆の中にはあっただろう、しかも若者にはあっただろうと想像されます。

例えば、1970年代になると、日本マクドナルドが出てきます。強烈な反米思想みたいなものは皆無になってきます。アメリカに対するイメージはかなり変化し、もちろん二極化はしますが、その一方が青春ドラマに現れた印象があります。以上でお答えになっているかどうか分かりませんが、そういった感じです。

清水：ありがとうございます。一つだけ付け加えたいのですが、青春ドラマと漫画は結構関わりがあると思います。漫画が、東京オリンピックからのバレーボールとか、特に大松（博文）監督の影響で『サインはV』とか『アタックNo.1』とか、そういう漫画が根性物として広まりました。それから梶原一騎とか、ちばてつやの『あしたのジョー』につながるような根性物のスポーツ漫画と、青春ドラマとの関りを教

えてください。

高井：承知しました。内容的にも関わるころがあると思いますが、まずキャスティングでかなり関わりがあると思います。例えば、『サインはV』は漫画が原作で、1960年代後半だったと思います。ドラマになったのも1960年代後半です。主役の（朝丘）ユミが岡田可愛で、『青春とはなんだ』と『これが青春だ』で、女子マネジャー役が出てきますが、それが岡田可愛です。ですから、岡田可愛を出しておけば何とかなるというか、みんな観てくれるだろうというキャスティング的な連続性はあったでしょう。『サインはV』はTBSなので、日テレの青春ドラマとはちょっと違いますが、でも明らかにそこは狙っていたと思います。細かい話ですが、

清水：ありがとうございます。

高橋：ありがとうございます。ほかの方はいかがでしょう。ないようであれば、私から一点、高井先生に、ドラマのこととは違うので反則の質問かもしれませんが、教育テレビは、教育的なコンテンツを作り出す一つの強力な力を持っていると思います。例えば、少年野球教室とか、サッカー教室の番組をやっていたと思いますが、そうした教育的なコンテンツ作りをメディアがやることで、学校体育に揺さぶりをかけることはあるでしょうか。

高井：教育的なコンテンツですよ。もちろん、教育を体育の教育かあるいは教育全般で捉えるかというので考え方が変わるとは思いますが、そもそもテレビと教育はすごく親和性があったと思います。それは、戦前からあるような、ラジオの英語講座とかそうですし、もちろんテレビでもそのようなコンテンツはあります。『セサミストリート』とかもそうだと思います。

もちろんNHK教育テレビもあります。それ以前にも、現在のテレビ朝日ですが、民放の教育テレビで、日本教育テレビもありました。それは佐藤卓己先生の研究に詳しいです。そう

いった流れで、例えば、ラジオ体操みたいなものが歴史的にはあると思いますが、あれを教育に位置付けるのか、学校でももちろんやりますし、公民館とかその辺の道端でもやっています。ですから、体育教育なのかスポーツなのか分かりませんが、ああいったものにも焦点を当てるとなると、非常に幅が広がって、それこそ市井先生の発表にあるような、「多様なスポーツ」にも、メディアの中のスポーツが教育的に関わるという回路ができるかもしれないという印象ではあります。以上です。

高橋：ありがとうございます。ほかの方、どうでしょう。ミュートを外して質問してください。いかがでしょうか。感想でも構いません。松田先生、どうぞ。

松田：バックヤード担当で、司会という形でも、聞いておりました。ありがとうございます。お三方に質問します。まず、原先生の話の中で、技術の変化が身体の社会的形式みたいなことを多様に広げていて、それに対応して学校体育はどう変化するのかという議論がありました。身体ということがベースになっていますが、例えば、近年の技術はスマートスピーカーでもそうですが、「楽しくなるような気分の曲をかけて」と言えば、勝手にかけてくれるみたいな、環境の側が拡張してきていて、その意味では環境と身体が一体化していくような、さらに質の変化した身体拡張場面が、つまり、身体と社会の位相自体が変わってきていると思います。そういうこととの関係はどう考えていらっしゃるんですか。

次に、市井先生の議論も大変面白くて、前半の部分で、特にライフスタイルスポーツは、確かに「ライフスタイルとしてのスポーツ」と言ってもいいのかなと思って聞いていました。ただ、その議論と、一番最後の、結局身体を育てる手段として、身体活動を教育に採り入れるということで落ち着いた関係が、私の中ではうまくつながらなくて、むしろライフスタイルとしてのスポーツは、お話にあったような、健康や体力の問題を超えた、それぞれの個々のライ

フの豊かさみたいなものの中にあるように感じたり個人的にはしております・・・。

話は飛びますが、例えばベーシックインカム の議論が出てきたときに、むしろ消費自体に生活の豊かさとかそういうものが移っていく時代が議論されているようです。その中で、スポーツ自体がライフスタイルとして非常に重要な位置を占めるという話と、でも教育の話になると、身体活動を手段としてというふうに着くと、その関係がどうつながればいいのか、お考えを教えてくださいました。

最後に、高井先生にはドラマからの社会意識というのが本当に面白くて、なるほどと思って聞いていました。一番最後のところで、非常勤の講師の物語というのは、実は可能性を持っているのではないかという議論がすごく興味深かったのですが、もう少し詳しく補足して聞かせていただければと思います。

お三方に共通して背景となっていると思っていたことは、結局、それだったら研究領域としてはスポーツ社会学でもよくて、体育社会学みたいな研究領域がもし独自に意義を持っているとすれば、今日の話だったら、教育ということが、大人か子どもか、社会体育なのか学校体育なのかは関係なく、どこかで重なっているところがあるということだと思いました。

そこでですが、教育の捉え方とか、教育と運動とかスポーツの関係の捉え方に関しては、何かいろいろと昨今、指摘はあるのですが、どこにとがったところがあるのか、さらに理解できると可能性としても考えられるのか、そのようなところももし含んでくださったところがあるとすればぜひお伺いできればと思います。質問しました。すみません、長くなりましたが、以上です。

高橋：ありがとうございます。原先生からお願います。

原：ありがとうございます。松田先生が言われたように、われわれの環境自体がものすごく変わっていると思います。その中で身体の位相自体が変わっているのではないかという指摘は、そうだなと思う一方で、環境が変わることに

よってわれわれの身体も変容しています。

そうなったときに、教育をどのように絡ませるのかを考えていかなければいけないと思います。環境によって、自然とわれわれの身体が変わるということであれば、わざわざ公教育として教育をすることが、もしかしたらいらないのかもしれないと思いました。

ただ、やっぱりそうではなくて、環境が変わって身体も変容する中に、何か教育的な営みとして教えるべき内容があるとすれば、そこは体育社会学として扱わなければいけないだろうと思いました。教育の捉え方自体をどう変えるかということまでは、今日は到達できていないので、そこについては考えてみたいと思いました。

高橋：ありがとうございます。市井先生。

市井：松田先生、質問、ありがとうございます。非常に難しい宿題をもらったと思います。確かにライフスタイルスポーツだったりニュースポーツを、体育社会学が対象としてきた教育の手段としての身体活動に、どういうふうに接点を持っていくかということです。自分がライフスタイルスポーツ研究やニュースポーツ研究を進めるにあたって、さまざまな先生方の先行研究を読みました。

そこで一つ感じたことは、特にニュースポーツに関しては、やはり今の体育離れであったり、スポーツ離れの若者に対してもう1回体育やスポーツへの動機づけをしたいので、いつでもどこでも楽しくできるものを導入したらいいのではないか、という関係者の思いがあるのだなと。それ故に、ニュースポーツの経験を通じて、「体育は面白い、スポーツはいいな」となったその先に体育という教科のカリキュラムに学生を導いていく。まさに、ニュースポーツはそのようなプログラムの呼び水というか、導線というか、そういったものとして扱われてきたという印象を、私は持ちました。

このような理解が正しいかどうかは、「もうちょっと研究しろ」と言われたら、「すみません」ということです。しかし、こういう捉え方をしたときに、今の新しいスポーツ潮流が、い

わゆる体育、スポーツへの呼び水として存在したままでいいのかと言われると、むしろそこでじっくりと体を動かすことだったり、みんながスポーツすることだったり、いわゆる身体文化をどう自分が実践し発展させていく主体となり得るのかということに、そういう考え方でアプローチすることはできないのか、自分なりに考えてみました。

例えば、今日も原先生が世界ゆるスポーツ協会の話をしました。私も世界ゆるスポーツ協会の取り組みを非常に注目しています。彼らは、ご当地スポーツの一つとして、富山県氷見市の教育委員会と共同して「ハンギョボール」というスポーツを開発します。氷見市はブリが名産ですので、ハンギョボールはブリを活用して、魚のぬいぐるみを脇に挟んでハンドボールをプレーします。しかも、得点を重ねていくにつれて、ブリは出世魚なので脇に挟む魚のぬいぐるみがハマチ、ブリとサイズが大きくなっていくルールがあります。このルールにより、プレーはやりにくくなりますが、そのルールがこのスポーツを面白くする仕掛けになっています。

そういったニュースポーツが、体育のカリキュラム教育のための呼び水、導線として位置付けられるのではなく、ニュースポーツを通じて、面白く楽しく体育、スポーツというものを経験し、さらに「スポーツや体育を面白くするにはどうしたらいいのか？」を考える可能性が開かれていると思っています。

そういった意味で、先ほどの松田先生の質問もそうですし、高橋先生からいただいたライフスタイルスポーツの近代スポーツ批判を背景にした場合、学校の体育の先生がニュースポーツやライフスタイルスポーツを取り込むことが可能かどうかというときに、私もいろいろ煮え切らない発言をしました。今の発言をしながら、いや、もしかしたらそれはそれとして取り込んで、導入してやっていくことでお互いにとって何らかの違う見え方ができて、さらなる発展の方向が、様々なハレーションも起こしながら、道を開くことが可能ではないかという感じがしています。

ですから、松田先生の質問に正面から答えた

ことになっていないと思いますが、やはり新しいスポーツ潮流が持っているポテンシャルを、いかに私たちが活用できるかというところに来ているのかなという感じはします。不十分な回答ですみません。以上です。

高橋：ありがとうございます。高井先生。

高井：松田先生、ご質問ありがとうございます。二点あったと思いますが、二点のご質問がつながっていると感じました。一点目については、非常勤教員のことにに関してという質問でした。実は、今日は体育教員の描かれ方の歴史みたいな話でしたので、きちんとは話せていませんが、恐らく青春ドラマと1980年代以降のドラマの中での体育教員の描かれ方はかなり違います。

私が「そうだな」と思いながら観ていたのは、1980年代以降は一貫して体育教員が不器用です。山下真司も日本代表ですが、やってることがすごく不器用で、例えば、ドラマの中で嫁に逃げられたりもしています。赤井英和もドラマの中で離婚しています。

ほかの科目の先生に共通しているわけではありませんが、器用な先生もたくさん描かれています。体育教員に共通して不器用というのがポイントじゃないかと思っています。ここは言葉の使い方がなかなか難しいところですが、現代社会のいわゆる雇用形態の問題が重要です。非常勤であることは、ドラマ全般の中では、例えば『ハケンの品格』というドラマがありました。ああいったもので描かれていると思います。

ただ、そういったものに加えて、言葉として適切かどうか分かりませんが、もし1980年代以降のドラマに描かれる体育教師像に「不器用」というイメージがあるとすれば、それは今置かれている困難な状況に、もっと言えば、雇用なり経済的な問題に置かれている立場の人たちにメッセージ性が高いと、言えるかもしれません。それは私の個人的な意見で、イメージ先行と言われるかもしれませんが、少なくともドラマを分析している限りはそう思いました。

二点目は、体育とスポーツの違いということ、体育学の先生方が散々議論してきたことで

す。私はもうそれに関して付け加えることはしませんが、簡単に言うと、体育は教育の一環です。スポーツは必ずしも教育であるとは限らないとは思いますが、これも先ほどの一つ目の話と関連していて、教育と言うからには、受ける側と授ける側がいます。

授けるほうが社会的弱者であるとか、あるいは貧困であるとか、そういった形は、一つのドラマの素材としては非常に可能性があるのではないかと、私自身は感じています。少なくとも常勤の教師は恵まれた立場に置かれています。もちろんブラック労働であるということはあるかもしれませんが、少なくとも毎月月給をもらえますし、ローンで家を買えます。そういった部分ではなくて、そうじゃない「非常勤」という社会問題を体現した教師は非常に可能性があって、そこはスポーツではなく、恐らく「体育教育者」といったところに親和性があると考えています。答えになっていないかもしれませんが、以上です。

高橋：ありがとうございます。市井先生の言う新しいライフスタイルスポーツとか、ドラマのほうがもっと極端なところで体育社会学が捉えるべき現象や対象を見せてくれるのではないかという感じがしました。今日聞いている人たちが、見失ってしまったのではなくて、もっと目を開いてみれば、実はまだまだ転がっているのではないかと、私自身は感じたところがありました。そんなふうにならなければ、今後またさらに議論していければ、体育社会学はやらなくていいというか、消滅してしまうという学問領域ではないという感じはしました。

共同司会者の松田先生、最後にまとめの言葉だけいただければ、時間が過ぎたので申し訳ありません。松田先生、一言まとめの言葉で締めたいと思います。

松田：この振りは全く予想していませんでした(笑)。すみません、まとめるというか、個人の感想で終わりますが、確かに体育社会学の「体育」という概念は、スポーツと教育で成り立つ概念ですが、教育に対するアプローチが、

実は研究のパラダイムがあまり変化していないのではないかと、そんなことを考えつつ、お三方のお話が、そのような課題に対して、視点を新たに与えていただけるものになっていると改めて思って聞いていました。

今日はそういう問題をじっくりと考えるために、とても面白い議論をいただいて、本当にありがとうございました。また、会員の皆様方とともに、引き続き、活発な議論ができればいいと思います。本日はどうもありがとうございました。

高橋：本当にどうもありがとうございました。

オンライン状況はパネリストの皆様には拍手もできないので、なかなか感謝をお伝えするのも難しいですが、本当にどうもありがとうございました。

原：こちらこそ、ありがとうございました。

市井：ありがとうございました。

高井：ありがとうございました。

(終了)